

## ルバイヤート

### 根来 滯子

いづ地より また何故か

知らでこの世に 生まれきて

荒野を過ぐる 風のごと

行方も知らに 去る我が

ルバイヤートより オマール・ハイヤーム著

矢野峰人 訳

捨てがたくて文箱に保存してある友人・知人からいただいた手紙の中に十数年前、何度かお目にかかってお茶をご一緒して語り合った阿部忠先生の、オマールハイヤームの詩が引用された美しい葉書がある。阿部先生の花文字の押印があるので、思い入れの深い詩なのだ。ほんの4、5年間のお付き合いであったが、手紙と葉書の束は5、60通を超えている。当時、高齢者にはメールよりも手紙のほうが手軽であり、今では古風な手紙のやり取りが、10数年前までは普通だっ

たのだ。阿部先生は武蔵野美術大学の教授を退職してから、厚木市で「美流」(ビル)というサークルの、絵画教室の講師をしておられた。知古を得た動機は、私が当時在籍していた厚木のエッセイ教室「道程」(みちのり)で、月に一度書いて提出していた私の作品を読んで感想を寄せてくださったことによる。会員の中に阿部先生の友人が在籍していて、会員のエッセイ集をお見せしたら、私の書いた作品が目にとまって感想を送ってくださったことによる。

会は、一人ひとりの作品について講師の批評や、会員同士の率直な感想を述べあうというにぎやかなものだったが、16年続いて数年前に解散してしまった。高齢になって出席できない人が続出してきたためである。先生の目に留まった私の作品の題名は「日影茶屋」。葉山にある大正時代から続くレストランの名前である。当時秦野市の公民館活動で読書会を開催していて私も在籍していたが、会で、瀬戸内寂聴の『美は乱調にあり』『諧調は偽りなり』という作品を取り上げたのがきっかけで舞台の一つとなったとなったレストランに向いた。大正時代の女性活動家、伊藤野枝を中心に据

えた伝記小説である。

「日影茶屋」は大正時代のアナキスト、大杉栄と、彼をめぐる3人の女性（妻の堀保子、伊藤野枝、神近市子）の4角関係の愛情の葛藤から、神近市子が、嫉妬にかられて、大杉栄を刺すというスキャンダラスな事件のあった旅館であり、傷を負わせただけで未遂に終わったが、現場の2階の部屋は現在使用されずにそのまま保存されている。一階は改築されて和風レストランになり、私たち読書会の会員8名は美しい懐石料理を楽しみながら、時代を疾風のように駆け抜けていった野枝の生き方を学びながら、2、30代で、自分の信念のために散っていった女性たちをしのぶために驟雨のなか「日影茶屋」を訪ねたのだった、

寂聴は、幸徳秋水とともに天皇暗殺の嫌疑で処刑された菅野すがの伝記を『遠い声』という作品で扱っているし、同時代のアナキスト金子文子についても『余白の春』で取り上げているが、私がとくに興味を持つのはのちに大杉栄の妻となった伊藤野枝である、郷里の福岡で、親の決めた結婚をするが、9日目に婚家先を飛び出し、上京して彼女の先生であった辻潤と同棲するが、やがて彼に幻滅し、アナキストの大杉栄のもとに走り、行動を共にして、1923年（大正12

年）28歳で彼とともに、甘粕正彦大尉らによって虐殺される。18歳から28歳の10年間に7人の子供を産み（2人は辻潤の子供）平塚らいちようから雑誌「青鞥社」を引き継ぎ、文筆活動にも加わり婦人解放運動に従事した。ロシアのアナキスト、エマー・ゴールドマンに傾倒し、「転機」という作品を書いた。私たちは読書会で「転機」も読んだ。「奴隷の勤勉さをもって働き、乞食の名誉をもって死ぬかもしれない」と激しい気概を述べている。

また、妻の堀保子、恋敵の神近市子に対しても「あんな二人に、どう間違っても負けるわけがない」と闘志満々である。津田塾出身の知性にあふれた神近市子が最初に精神を破綻したのは皮肉である。

伊藤野枝に関しては最近発行の村山ゆか作『風よあらしよ』にもくわしい。綿密な取材をかさねての、長編の力作だが、私は寂聴のほうに興味を引く部分が多かった。日影茶屋での懐石料理を愛でながら、読書会で取り上げた小説の感想を述べあった。

しかし、100年近い前のこの事件を私たちは冷め切った気持ちで見ることしかできない。言論も宗教も自由で（と思いたい。政治家は私欲に走り、信念をもて国政に携わっているとも思えない現在、私たちが「日

影茶屋」に出かけたのも、身を挺するほどのイデオロギーにも、恋にも会おうことなく過ごしている平和ボケした主婦が、懐石料理を楽しむことが最大の目的だったかもしれないと思う。雨にかすんで地平線も定かではない湘南の海のはるか水平線上に一筋の光が流れていた。それは、明日の好天を予感させるものであった。

「道程」に掲載された私の「日影茶屋」を読んでくださった、前述の阿部先生が以下のようなお手紙を下さった。「昭和29年、彫刻家（美術家）見習いで上京した際にお世話になった方の工房は豊島区にあったが、自宅は鶴沼海岸にあり、何度かお訪ねした、そこは大杉栄と伊藤野枝の次女エマさんの家であり、2階には大杉栄が残した蔵書の山があり、ファアブルの『昆虫記』が印象的だったこと、（大杉栄と伊藤野枝の共著でファアブルに関する

『科学の不思議』を刊行している）。エマという名前も、エマ・ゴルドマンからいただいたものであるということであった。エマさんが写してくれたという、大杉栄の孫の碌ちゃんと一緒に移した写真が添えてあった。そのお手紙にどのようなお礼状を差し上げたか忘れて

しまったが、それがご縁で、現在も存在している厚木近辺の喫茶店で先生とお話をする機会を得た。

先生は石の彫刻家で、日本美術協会の会員であり、上野の都美術館で開催される展覧会に毎年作品を発表していた。石の彫刻は私にとって珍しく、何度か足を運んだが、まさに前衛美術であり、理解を超えるものであった。たとえば「雷のへそ」という題の彫刻にも、題名の由来も、表現しようとする意味もついにわからなかった。工房は相模川のほとりにあり、薄暗い、殺風景な土間にフクロウが、知恵の王者のように友人のような顔で鎮座しているのが印象的であった。

私と同年輩の先生は、寡黙ではあったが芸術家でありがちな変人ではなく、ごく穏やかな、何物も達観しているような風情があった。天王洲アイルで個展を開いたりして、サークルの指導者としても熱心で人望もあるようで、グループ展を銀座の画廊で開催するほどの人脈をもっていた。会員の油絵も風景あり、静物あり、高レベルだと痛感した。銀座でこれだけのスペースを一週間も借りるということは大変な経費だと思われたが、先生の配慮によるものだと聞いた。プロだという奥様の生け花が場内を圧倒していたし、会は盛況だった。



先生はしばしばオマールハイヤームの『ルバイヤート』の詩を話題にした。詩の何作かを暗唱するほど傾倒していた。オマールハイヤームは11世紀のペルシヤの詩人であり、哲学者、科学者であり『ルバイヤート』の作者である。ルバイヤートとはアラビア語で4行詩を意味し、ペルシヤ（現イラン）に伝わる詩形である。

最初に日本に伝わったのはイギリスの詩人、エドワードフリッツジェラルドの英訳を、詩人蒲原有明が和訳し、『春鳥集』に収録し、のちに森亮の訳で広く知られるようになったという。そのほか、英語版からの重訳

は矢野峰人、竹友藻風。原語からの訳では小川亮、黒柳恒男、等多数。私が購入したのは、マール社、竹友藻風訳であるが、国書刊行会、矢野峰人訳の『ルバイヤート』は豪華版で5000円以上するものであった。訳も格調高く、美文調である。阿部先生はそれを所有していて、得意そうに見せてくださったが、一般的に出回っているのは岩波書店発行の、小川亮訳のようである。先生は心に響いた作品に自分の心情を託して葉書にしたため、何かの折に友人に配っていた。

ハイヤームは科学者であり、また哲学者としても有名で、むしろその分野での研究書が多いようだが、『ルバイヤート』に表現されている4行詩の世界では、冒頭に乗せた詩のように大変に虚無的であり、厭世的といえる内容で、人生を達観し、酒を愛する詩が多い。

死んだら俺の屍は野辺に捨てよ

美酒を墓場の上に降り注いで

白骨が土と化したらその上から

瓦を焼いて、あの酒瓶の蓋にして

「過去を思わず、未来を怖れず、ただこの一瞬を楽しめ」、「この瞬間こそが人生だ」、「もともと無理やり連れだされた世界なんだ、生きて悩みのほか何があったか 今は何のために来たり住み、そして去るのやらわ

かりもしないでしぶしぶ世を去るのだ」、「限りなき空の広さも虚無、地上の全ても虚無。さあ楽しもう生と死の谷間にいる身だもの」等々、利那主義の世界をペルシヤの詩人は繰り返して詠っている。

先生がなぜ『ルバイヤート』にひかれたのか、宇宙的な広がり、ある種デカダンな魅力にひかれたと話したが、先生は決して利那主義の生き方をしてきたわけではなく、無機質な石に魂を与える彫刻を、心身ともに闘争の意欲をもって向き合い、相模原の河辺に近い工房で一人黙々と鑿をふるう。内面には私の想像もつかない激しい炎と向き合ってきたのだと思う。しかし、その片鱗も表に表すことはなかった。

手紙の束を読み直して見ると、美術展の案内とか、芸術仲間の友人たちとのやり取りとか、特にアメリカに移住して彫刻に励んでいる友人のM氏についての話題が多かった。ヘミングウェイの『老人と海』に心を打たれていて、老いに対する嘆きはしばしば話題に乗った。

私の稚拙なエッセイに毎回感想をよせてくださったが、秋も終わりのころ、さりげなく「しばらく会えないかもしれない」とつぶやいた。お忙しいのですか、という問いに「いや一寸身体の具合が悪くてね、入院

すると思うけど心配するほどじゃないから」と微笑んだ。「レプリカだけ」といって石膏に描いた横顔の婦人像の絵をくださった。私はそのころ声に力がなくなっているのを感じていたが、もう治ることのない病気を抱えていることなどまったく想像もしていなかった。先生は私がお目にかかった当初から病気を抱えていらしたのだ。厚木の、天井に丸太を張り巡らしたレトロな喫茶店の小さな窓からきらめく秋の日差しが店内にあふれていた。深煎りのマンデリンの香りが満ちて、先生はいつもと同じであった。それが最後で私は先生と再び会うことはなかった、新年を迎えることなく先生は75年の生涯を閉じた。

幼いときから教会に通い、洗礼をうけて、本人の意思とは無関係に信者になるように、私は町医者だった父から「死ねば無」という言葉を何度か聞いて育ち、それが私の信仰になった。

ルバイヤートの世界は私の世界でもある。

(2023年 12月)